

## コミュニケーションは母語から—通訳の現場は異文化の駆け引き

アルベルト松本(アルベルトまつもと)

私の母語はスペイン語、それもアルゼンチンのスペイン語で南米諸国の中でもかなりクセがある。イタリア人移民等の影響でかなり独特な表現も多く、日常会話の俗語は地元の間でなければ把握できないものも多い。同じスペイン語圏の国々にも当然ながらそれぞれの地域性があり、日常会話にはかなりユニークな表現がある。しかし、スペイン語圏のいかなる国でも「国語」を勉強する際スペインお墨付きの文法をもとにした教科書によって自分たちの「国語」を学ぶ。その結果、この文化圏の二十数カ国ではある程度表記や表現が統一されており、問題なくコミュニケーションがはかれる。

この共通母語によって私はスペイン語通訳として日本で活動している。英語ほどではなくとも、かなり広い地域から来るビジネスマンや政府高官、識者や専門家等のアテンドを仕事にしている。渉外法務関係の翻訳業務もしているが、そこで扱われるような専門的な用語と内容は、日本の大学で日本語で学び、そのあと母語であるスペイン語で表現できるように専門文献を取り寄せて勉強し、訓練した。今は法廷通訳としても刑事事件や民事事件、家事事件においても依頼者である裁判所、企業、個人のニーズに対応できるようになった。

そもそも、日本語の勉強は、地元アルゼンチンの義務教育を受けながら日系人コミュニティの「日本語学校」で国語の教科書のみで六年間勉強したのが始まりである。そのあと中学高校は独学で日本の新聞・雑誌の記事等を参考に漢字をマスターしたぐらいで、本格的に日本語の読解や文書の書き方を学んだのは、日本に留学してからである。来日して十六年になるが、はじめはすべてのことをスペイン語でイメージしてしまい、西和・和西辞典なしにはとても不安で自分の考えや伝えたいことをきちんと表現できない状態だった。しかし一定のレベルに到達し、漢字能力もアップした段階からは国語辞典を使うようになり、常にポケットサイズの辞書を携帯するようになった(今は電子辞書)。それ以来、私の日本語は飛躍的に伸び、日本人ともきちんと「日本人らしく、日本人にも信頼される日本語」で意思疎通ができるようになった。来日してから八年目ぐらいのことであった。

今は日本語でも考えるようになり、文書にしてもかなり表現できるようになったことで、ちょっとした記事や原稿も書けるようになった。昨年の九月には、念願だったアルゼンチンに関する本を出すことができ、とても充実した一時を得た(『アルゼンチンを知るための五四章』明石書店)。

通訳の現場は、異なった言葉だけではなく日本人とは全く違う文化体系や価値観の人たちが接触する場であり、ビジネスや政策の行方が関わってくるときは利害の対立も激しい。間に立つ通訳者は駆け引きの狭間で二つの言語をきちんと誠実に伝

える責任を背負う。通訳が日本人であるか私のような外国人であるかにかかわらず、ラテン諸国から来るしたたかな人々は、交渉が自分たちにかなり不利な状況だと分かっているにもかかわらず、時にはギリギリまで通訳の同情を買うような振りをして有利な環境を作ろうとする。だからこそ、通訳は語学の実力だけではなく、自分の信念やポリシーを持ち、ホスト国である日本と相手国の歴史や政治・経済・社会について相当の知識を身につけ、そうした諸条件を持っているということも、当事者に「表現」する力とエネルギーが必要なのだ。容疑事実や責任を追及する裁判所ではなおさらである。

ここでやはり重要なのは、自分の母語をしっかりと身につけ、その母語によって得た知識や教養である。そして物事の本質を見通す判断力が勝負を決める。一般の日本人が好む「通訳のハウツーや単語集の暗記」では意味がないのである。私の場合母語であるスペイン語が軸になっているが、今は日本語で情報収集し、日本語で知識を身につけるようになったことで表現力も大幅にアップした。日本人の場合、母語である日本語をしっかりと身につけ、歴史や社会の特徴を外国人が納得できるような論理で明確に伝えられる条件を整えれば、立派な通訳コミュニケーターになる。今後観光分野で注目を浴びそうな通訳ガイドは特にそうである。

他方、日本では小学校からの英語教育にも重点が置かれるようになったが、軸になる母語は一つにしたほうが他の言語を学ぶにも有効と考える。安易な、そして中途半端な多言語・多文化コミュニケーションは、逆に表現能力を乏しくしてしまう危険性さえある。

私も日本が生活と仕事の拠点である以上、やはりメイン言語が日本語になってきており、今度は逆にスペイン語のレベル低下を防ぐためにマドリードやブエノスアイレスの書店から小説や専門書を取り寄せて読んでいます。それでもまだ完全なバイリンガルではないと思っています。

(スペイン語通訳・翻訳者、情報誌「MUSASHI」編集長)

<http://www.ideamatsu.com>

